

第7章 キャリアデザインと大学の学び

1 はじめに一キャリアデザインとは一

これまでの皆さんの生活のなかでは、「キャリアデザイン」という言葉は馴染みのうすい言葉かもしれません。でも少し気をつけてみると、最近では新聞やテレビのニュース、書店の本棚などで「キャリアデザイン」とか「キャリア形成」という言葉がよく目につきます。これは、複雑化、多様化する現代社会にあって、個人の「キャリア」というものに注目が集まってきた、あるいは見直されてきたためと考えられます。ここでいう「キャリア」とは、職業上必要とされる能力のことです。企業等の職場においては、経済のグローバル化や競争の激化にともなって職業上求められる能力も高度化、専門化しています。同時に終身雇用が原則であった雇用形態も多様化しており、これからの社会は、ますます個人としての力量が問われる時代になってきたと考えられます。終身制雇用のもとでは、企業が社員を教育し、時間をかけて一人前に育てていくというやり方が一般的でした。ところが終身制雇用の原則が崩壊し、企業間の競争が激化した現代社会においては、職業上必要な能力は、みずから学び獲得するという姿勢が求められるようになってきたのです。

「キャリアデザイン」をもう少しよく理解するために、「キャリア」という言葉について考えてみましょう。英語では、Career と綴り、本来は車輪の轍（わだち）を意味する言葉ですが、今日では、「学歴」「経歴」「職業」「進路」など、人の歩みや歴史を示す言葉として使われています。「キャリア」には、先に述べた職業上の能力とは別に、生涯にわたるライフスタイルや、職業とは関係のない経験やその経験によって得られたスキルなどの意味があります。文脈によって様々な意味をもつ言葉ですが、概ね以下の4つに分類できるのではないのでしょうか。

- ①職業を通じて得た経験、地位、能力など
- ②高度に専門的な職業（または職業上の能力）
- ③生涯にわたる生き方（ライフスタイル）
- ④職業とは関係のない経験やその経験によって得られたスキルなど（主婦としてのキャリア、親としてのキャリアなど）

大学生活において、就業経験のない皆さんに対して「キャリアデザイン」というときは、

③の要素が強くなり、場合によっては「ライフデザイン」といった方が分かりやすいかも知れません。しかしこの場合も、当然ながら職業選択とは深く関わっています。あえて定義するなら、「職業選択を含めたこれからの生き方、人生をよりよく生きるための将来計画」ということになるでしょうか。大学生活を、将来の自分と直接関わりあるものとして捉えることができれば、「キャリア」形成を意識した学生生活を送ることが重要だと気づくことでしょう。将来に向けた準備をする時間が限られているということから言えば、この気づきは早いに越したことはありません。しかし同時に大学での4年間は時間をかけてゆっくりと自分を見極め、将来を考えることができる貴重な時間です。矛盾しているようですが、要はあまりに急いで目標を決めてしまうべきではないということです。

さて、職業上の能力としてのキャリアにもふたつの側面があります。ひとつは、仕事と密接に結びついた知識やスキルであり、専門的な仕事に就くための資格や仕事を続けるうちに経験的に身につく力を指す場合です。例えば教職や司書、学芸員、公認会計士、司法書士、弁護士などの資格はこれにあたります。今ひとつは、みずから考え、学ぶ態度や意欲、やる気などのように、職種とは関係なくどのような仕事にも共通して求められる基礎的能力という側面です。前者は「専門的職業能力」であり、在学中に専門的資格を取得する場合を除けば、多くの場合は就職してから身につけていくものでしょう。しかし、後者の「基礎的能力」は、大学での学びを通して、今から磨くことができるものです。この基礎的能力を開発、獲得できるかどうかで、4年後に形成される「キャリア」は大きく変わってくるでしょう。この章では、「キャリアデザイン」について、この基礎的能力との関係をふまえて述べてみたいと思います。

2 キャリアデザインと自己認識

皆さんの多くは4年後には大学を卒業し、社会に出て働くことになるでしょう。ただし、入学直後の1年次春の段階では、将来の職業までイメージできている人、言い換えれば将来の目標を明確にもっている人は少ないと思います。現代社会においては大学を卒業した若者が3年以内に職を離れる率は30%を超えており、しかもその半数が1年以内に職を変えているといわれています。間違いのない職業選択をし、職業との不適合を防ぐためには、自分をよく理解するという姿勢が不可欠です。自己理解を深めた上で業界研究、進路選択へと進むことが求められているのです。では、職業選択はどのようなプロセスを経て、どのように進めるべきなのでしょう。この項では、職業選択を含めたキャリアデザインと

自己理解および自己同一性（アイデンティティ）との関係を述べてみたいと思います。

人間は誰しも、その人なりの自己理解を自分の内に持っていると考えられます。漠然とではあるが、自分の長所や短所をよく理解し、今までの生き方とこれからの生き方が明確で一貫性がとれており、しかも周囲の人もそのような自分を受け容れ、認めてくれている。このような人は、自己一貫性がとれており、ある程度自己同一性（アイデンティティ）が確立された状態にあるといえるでしょう。しかし、成長期にある皆さんにとって自己一貫性を保つのは極めて難しい課題であると考えられます。自己理解とそれに伴う自己認識は、成長期には不安定であることが多く、確立途上にあるからです。自分では未だ気づいていない能力が潜在していることもあるでしょう。自分を振り返る都度、新しい発見があるのもこの時期の特徴なのではないでしょうか。このような時期の自己評価は常に定まらないかもしれません。しかし職業選択など、決められた答えのない課題に対応していくためには、不安定ではあってもその時々自分をよく知ることが出発点となるのです。

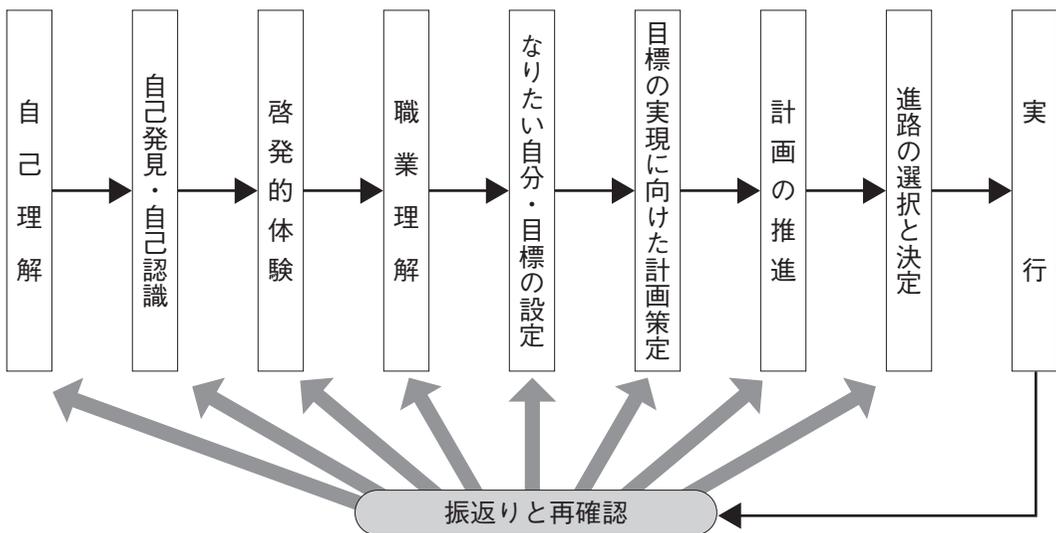


図1 自己理解を起点とするキャリアデザイン

図1は、自己理解を起点とするキャリアデザインの一般的な方法を示したものです。過去の自分を振り返って自己理解を深め、新たな自己認識をもとにして、将来の自分を描いていく手順を示しています。「啓発的な体験」には、例えばインターンシップのような就業体験があります。教員を目指している人にとってはスクールボランティアや教育実習なども職業選択の上では重要な体験になるでしょう。自己認識をふまえて職業研究や業界研究を行うことで、より具体的な目標を立てることができるようになります。やがて「なりた

い自分」が思い描けて目標が明確になると、今度は現在の自分とのギャップを埋めるために、何が必要なのかを考え、なりたい自分に近づくための学習やスキルアップの計画を立てることが必要になります。その計画を推進することで、成長を実感して確かな手ごたえを感じられれば、目標の達成はぐっと近くなります。さらに具体的な職業選択、進路決定へと進むことができるでしょう。

実際には、職業研究を進める過程で新たな発見があって自己認識が深まったり、啓発的な体験をすることによって職業研究に対する新たな意欲が湧いてきたりすることもあるでしょう。大切なのは、常に振り返りと再確認を怠らないようにすることです。これらの作業を様々に思考錯誤しつつも繰り返し行っていくことで、視野を広くし、自分にふさわしい職業に就く可能性が高まっていくと考えられます。

3 大学の学びで身につく力とは—知識や技能を活かす力の存在—

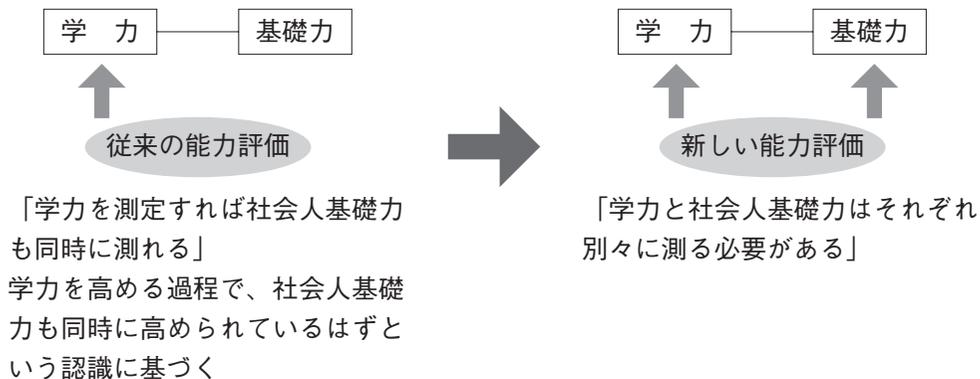
第一項（P52）では、キャリアの意味する職業上の能力には、二通りの側面があること、そのうち基礎的能力は、大学での学びにおいて今からでも磨くことができるものであると述べました。そのことについてもう少し深く考えてみましょう。大学の授業というとき皆さんはどのようなことを連想されるでしょうか。おそらくは高度に専門的な知識やスキルを習得することを思い浮かべるのではないのでしょうか。これも大学の授業の一面ですが、大学では、同時に高校までの学習内容の復習を行う授業や基礎的な授業も開講されています。学科によって多少異なりますが、1、2年次は英語などの語学をはじめ、教養総合科目を中心に履修します。多くの学科では、専門的知識やスキルを高める専門教育科目は3年次や4年次に配当されています。英語が卒業後の社会生活や職業生活においても必要であることは、皆さんも容易に理解できることでしょう。では、各学科の専門教育科目とそこで展開される学びは、将来皆さんが就く職業とどのように関わっているのでしょうか。例えば、日本文学科に入学して国語の教員を志す人や、法律学科の法律専門職専攻に入学して、弁護士や司法書士をめざす場合など、あるいは経済学科に入学してファイナンシャルプランナーを志望する場合などは、各学科の専門教育は将来の職業との関係が強く、授業にも自ずと興味ももてることでしょう。しかし、すべての日本文学科生が国語教員や研究者をめざしているのではないことも事実です。では、日本文学科に入学して一般企業への就職を考えている人にとって、日本の古典文学や伝承文化を研究する授業は意味がないのでしょうか。実はおおいに意味があるのです。日本文学科に限らず、演習やゼミなどの授業

で発表を行う際には、資料を探し、資料を読み、先行する研究を調べ、発表する内容を整理し、自分の言葉でわかりやすく伝えなければなりません。この学びの過程で求められる力は、探求心、情報収集力、読解力、論理的思考力、文章力、表現力などです。これらの力は、第一項で述べた職業上の基礎的能力と大きく重なり合うことがわかります。これは全ての学科の全ての授業に共通することだと思われます。大学の学びでは、基礎学力を高め、専門的な知識やスキルを身につけることも求められますが、これらの知識やスキルを的確に活用するための思考力や応用力、他者に伝達する能力、あるいは伝達したいという意欲や積極性などを高めることも同じくらい重要なのです。大学での学びで得た力を将来に活かすためには、授業ではより深い体験を求める積極的な姿勢が求められているといえるでしょう。授業と将来の自分との関係性がわからなくなり、授業に意義が見出せなくなったときは、ぜひこのことを思い出していただきたいと思います。

4 社会で必要とされる力—社会人基礎力とは—

前項で述べたように知識やスキルを活用する能力、あるいは他者に伝達するための表現力や意欲などは、大学で磨くことができるものです。では、卒業後の実社会では具体的にどのような力が必要とされているのでしょうか。本項では、企業社会で必要とされる基礎的能力について説明します。近年の企業社会のIT化、グローバル化のなかで、企業間の競争が激化し、終身制雇用の崩壊とともに、従来よりも個人の力量が問われる時代になったことは先に述べたとおりです。そのような社会の変化をうけて「人間力」や「社会人基礎力」という言葉が、大学等の教育現場でもよく聞かれるようになってきました。「人間力」を提唱したのは、内閣府（2003年）、「社会人基礎力」を提唱したのは経済産業省（2006年）ですが、ここでは経済産業省の「社会人基礎力に関する研究会」報告をもとに、大学の学びとの関係を考えてみたいと思います。

従来、基礎学力は小学校、中学校、高校までに修得し、大学では主に専門知識を学ぶものとされてきました。そして学ぶ意欲や態度、実行力、思考力、表現力などの基盤的な能力は、基礎学力を固め、専門知識、スキルを習得していく過程で、自然に身につくものと考えられていたのです。ところが近年、学力はあるのに意欲や積極性に欠ける学生や、高い専門的知識やスキルをもちながらそれを応用できない若者が増えてきたことが指摘され、学力と基礎的能力との相関は必ずしも高くないという考え方が一般的になってきました。



(2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より)

図2 新しい能力評価

経済産業省は、事態を憂慮する産業界の要請を受け、2006年2月「社会人基礎力に関する研究会」報告書を作成しています。報告書によれば、「社会人基礎力」は職場で働くために求められる基盤的能力として説明され、【図3】に示す3つの力と要素から成ると定義されています。

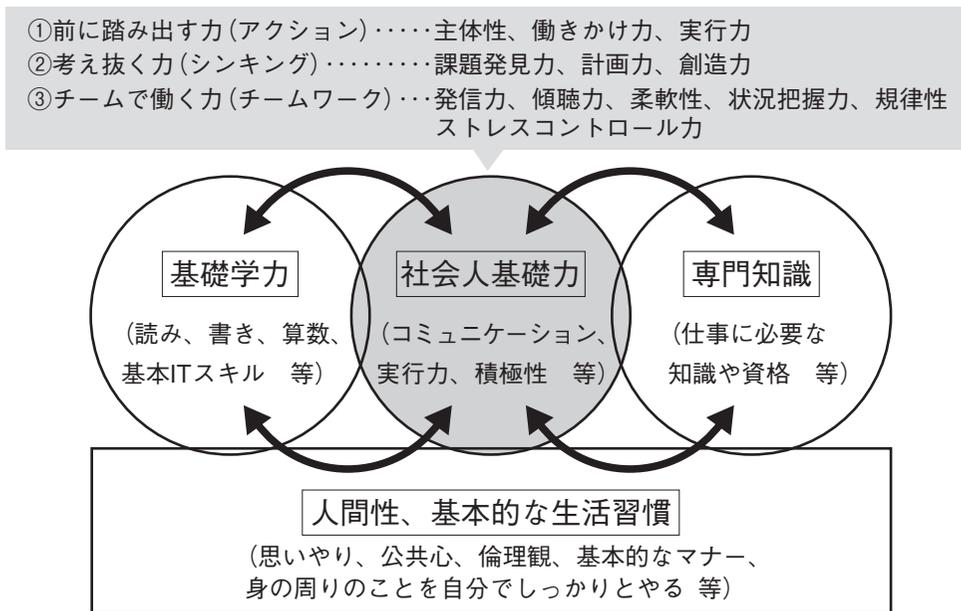


図3 社会人基礎力 (2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より)

この社会人基礎力の構成要素は本章の終わりにさらに詳細な表をつけてあるので参照してください。これらの力は、一般的に人間として備えるべき能力であるともいえますが、社会で知識やスキルを存分に発揮するためには、確かに役に立ちそうです。また第一項

(P52) で述べた職業上の能力としてのキャリアを形成していく上でも、その原動力となるものではないでしょうか。同時に前項で述べた大学での学びにおいて求められる力とも非常に相関が高いといえます。

こうした企業社会の要請や産業界の動きは、企業等の採用の現場にも反映され、近年では、採用面接時にグループディスカッションを行って、人の意見を聴く力、自分の意思を表現する力など学力では測れない能力をみる方法が主流になってきました。

5 「自分史」作成とキャリアデザイン

國學院大學は、学生支援の一環として、早くから学生の自己理解を深め、キャリアデザインを意識してもらうことに取組んできました。平成19年度には、「学生みずから発信する『自分史』作成支援—社会のなかでの自己活用力養成プログラム—」を推進することを企画しました。この取組みを、平成19年度文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に応募したところ、長年にわたり真摯に学生支援に取り組んで来たことが評価され、採択されることができました。文部科学省の推進する「新たな社会的ニーズに対応した学生支援」は、ニート・フリーターの増加や若年層の失業率が高い現代社会の課題を解決するため、若者の自立を支援するプログラムです。本学が、学生のキャリア形成をめざして計画した「自分史」作成と、文部科学省のめざす若年層の自立支援は、その目的において共通する取組みであるといえるでしょう。

学生みずから発信する「自分史」作成支援

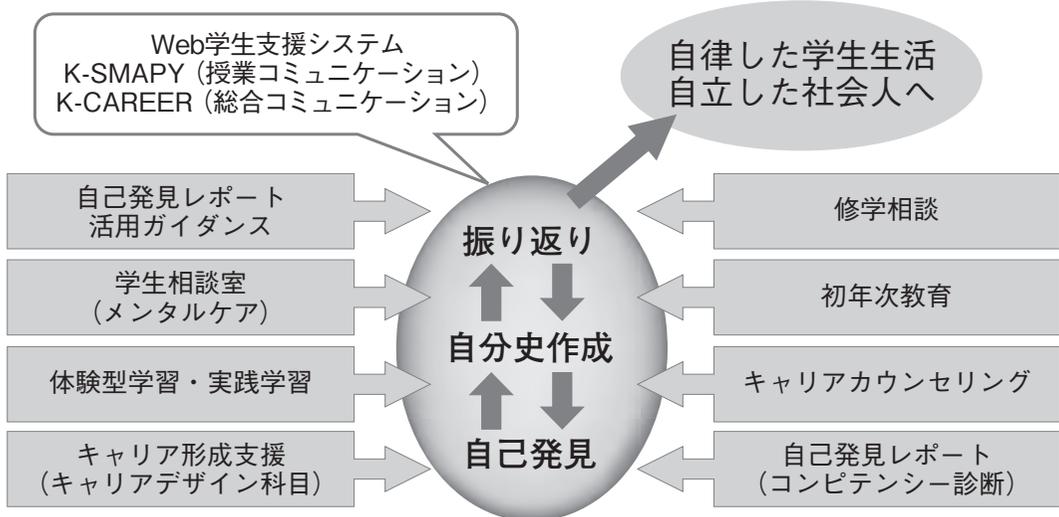


図4 「自分史」作成を軸としたキャリアデザインのイメージ

【図4】は、本学の推進する「自分史」作成支援のイメージです。各種のアセスメント（評価）や教職員との面談、さらにはキャリアデザインを支援する授業等を通じて、学生が振り返りと自己発見を繰り返すことを図式化しました。こうして自律した学生生活を送り、自立した社会人として巣立つ過程を表しています。本学では「自分史」作成を支援するため、1年次の入学直後に自己発見レポート「コンピテンシー診断」を実施し、5月には活用ガイダンスを実施することで、自己理解を深めてもらう取り組みを進めています。また専任教員による初年次教育では4年間の過ごし方と専門教育への導入が主要なテーマとなります。修学相談やキャリアカウンセリングは、専任の教職員との面談によって行われ、自己理解を深めるために、他者からの評価を受ける良い機会となっています。キャリアデザインを目的とする授業科目やガイダンス、Webシステムによるデータの提供等が行われています。

上記の取組みのうち、1年次に実施される自己発見レポート（コンピテンシー診断）は、皆さんが現在に至るまでに、自己の内に形成してきた様々な個性のうち、特に社会的な強みや弱み、行動や興味の特性などを測定し、自己理解を深めようというアセスメントです。具体的には【図5】に示す項目を測定し、学生支援システム K-SMAPYを通じて、皆さんにフィードバックをします。この結果は、皆さんが自分自身を振り返り、自己理解を深めるためのよりどころとなることでしょう。

自己コントロール力	対人関係	社会的な態度
<ul style="list-style-type: none"> ・意欲 ・自主性 ・適応力 ・自己統制力 ・ストレス耐性 ・持続力 	<ul style="list-style-type: none"> ・協調性 ・共感力 ・発信力 ・説得力 ・指導性 	<ul style="list-style-type: none"> ・創造的態度 ・現実的態度 ・情報収集力 ・論理性 ・規律性 ・国際性 ・IT適応力

図5 自己発見レポート（コンピテンシー診断）の測定項目

自己理解を深める「自分史」作成は4年後のキャリアデザインにも大きな影響を与えるはずです。自己理解をもとに「自分史」を記す作業は、「自分とは何か、どこへ行くのか」という人生の普遍的な問いに対して答えを探すことにもなります。この意識改革によって、授業や課外活動に対する新たな希望や意欲が生まれ、大学生活全般において積極性が高まることが期待されています。ぜひ「自分史」の作成にチャレンジしてみてください。

6 終わりに

本章では、大学4年間を無為に過ごすことなく、自己認識や目的意識をもってキャリア形成や能力開発を行っていくことが重要であると述べてきました。主として職業上の能力としてのキャリアについて言及してきましたが、皆さんは安定した職業に就くためだけに大学へ入学されたのではないと思います。たとえ第一志望の大学ではなかったにせよ、大学生活は宝の山であることは間違いありません。一生の師や友人、なかには生涯の伴侶にめぐりあう人もいることでしょう。大学の4年間は、ライフデザインとしてのキャリアにも、きっと大きな影響を与えることが待ち受けているはずです。積極的にいろいろなことにチャレンジしましょう。

なお、全ての教職員は皆さんのライフデザイン・キャリアデザインが共に実りあるものとなることを願っています。迷ったときや弱気になったときは、友人や両親のほかにも、教員・職員も皆さんを後押しする存在であることを思い出してください。授業では少し怖そうにみえる先生も、キャリアサポート課や教務課の職員もきっと親身に話を聴いてくれるに違いありません。

【参考資料】 社会人基礎力の能力要素

2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらおうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。